主婦の個室に対する意識:家族コミュニケーションへの影響について：家族の自立を可能にするための住居計画的研究 (2)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田坂, 恭子, 町田, 玲子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/11028

京都府立大学学術報告（人間環境学・農学）第49号　p. 13～21（1997年12月）

主婦の個室に対する意識
── 家族コミュニケーションへの影響について ──
家族の自立を可能にするための住居計画的研究(2)

田　坂　恭　子[*1]・町　田　玲　子[*2]

Housewives' Thoughts on Their Private Space:
── Effects of Communication in the Family ──
A House-Planning Study for Establishing the Individual in the Family (2)

KYOKO TASAKA and REIKO MACHIDA

抄文：子供（末子）が高校生以上である世帯，あるいは高齢の親と同居する世帯の場合，主婦の個室所有が家族のコミュニケーションにどのように影響を与えるか，また主婦個室の理想像において，どの程度家族のコミュニケーションが意識されているか，について明らかにするためにアンケート調査を行ない考察した。その結果は以下の通りである。1）主婦が個室を所有する場合，子供が学生である世帯よりも社会人である世帯において，家族コミュニケーションは良好な状態にある。2）親が同居する世帯については，主婦が個室を所有する場合は所有しない場合に比べて，家族コミュニケーションに対する満足度は低いが，主婦個室の存在が主婦の精神的安定をもたらしている割合は高い。3）自由記入欄の記述にみられる主婦個室の理想像において，家族コミュニケーションを意識した図や文章例は，個室を希望する主婦全体の3割程度である。

（1997年9月12日受理）

緒　言

「個室を持ちたい」と感じたり，「個室を持っていて良かった」と実感している主婦は多いが，一部には「自分が個室を持つことで家族のコミュニケーションが減るのではないか」と危惧する主婦も少なくない[*1*3]。とくに高校生以上の子供，あるいは高齢者（以下，親とする）が同居する家族形態では，それぞれの間の価値観の差を意識しやすいライフステージにあり，個人的生活の場と家族生活の場との関わり方は重要である。

そこで本報告では，この家族形態に関して，主婦の個室と家族コミュニケーションの関連性を明らかにし，家族コミュニケーションの視点から主婦の望む個室像について考察することを目的とする。

高校生以上の子供あるいは親が同居する家族形態に対象を限定したのは次のような理由である。①既存研究[*2]において，子供が小中学生段階では主婦の団らん空間にいる時間が長い方が家族のコミュニケーションの質は良くなるという報告はあるが，高校生以上の子供のいる家族形態の住空間と家族コミュニケーションとの関係についての報告例はみられない，②既存研究[*3]において，子供がいる世帯ではライフステージが進むにつれて主婦の個人的空間所有率が高まる傾向がみられるので，個室所有率も高まることが予測される，③既存研究[*3]において，主婦の個人的空間所有率は親同居世帯が親非同居世帯より高いので，個室所有率についても高いことが予測される，の3点である。

本研究は，家族の生活的自立の育成につながる住居計

*1 東日本ハウス株式会社
HIGASHI NIHON HOUSE CO., LTD.
*2 京都府立大学人間環境学部
Faculty of Human Environment Kyoto Prefectual University

画のありかたをさぐろうとするものであるが，本報告はその一資料とするものである。

研究方法

高校生以上の子供（但し末子とする。以下同様）あるいは親が，同居する家族形態については下記の手順で抽出した。

まず本学の卒業生を調査対象として主婦の個人的空間に関するアンケート調査を行い（第一次調査），その結果から該当するライフステージ層あるいは家族形態を取り出し，詳細なアンケート調査（第二次調査）を実施した。具体的には次の通りである。

①（第一次調査）本学の昭和27年度～平成4年度の生活科学関連の学科・学部出身の卒業生全員（1526人）に郵送によるアンケート調査（無記名回答）を実施（1994年10月）。内容は，主婦の個人的空間に関する意識と所有の実態，希望の個人的空間についての意識など。回収数809，有効回収数807，有効回収率53%。②（第二次調査）上記アンケート調査の回答者層のうち，高校生以上の子供あるいは親が同居する家族形態を調査対象とした。第一次調査において被調査者の意思で記名のあった全世帯（計145例）に郵送によるアンケート調査を実施（1995年11月）。回収数70，有効回収数62（うち6は高校生以上の子供と親が共に同居する世帯であるため分析対象数は延べ68），有効回収率43%。なおアンケート調査内容の充実と確認のため一部について補足調査（自宅に訪問，あるいは電話によるヒアリング調査）を実施。

③1994年に実施したアンケート調査（①）において，高校生以上の子供あるいは親が同居する家族形態が自由記入欄に示した内容（文および図）に関して分析。対象総数は無記名者も含め計194例。分析時期1996年7月。

結果および考察

1．第一次調査における当該対象世帯の概要

1）家族構成・住宅形式

表－1に示すように，中高生以上の子供のいる世帯（親同居含む）は336（全体の42%），親同居世帯128（同16%）である。これらの世帯の住宅形式の各割合は，一戸建81.2%，集合住宅14.6%である。当調査対象世帯全体に占める一戸建の割合67%，集合住宅の割合28%に比べ，一戸建の比率がかなり高い。

2）個室の所有実態

第一次調査対象世帯の全体の概要と当該家族形態における個室の所有実態は以下の通りである。

① 全体の概要……既存研究[*3]に示したように，「他室から独立した個室」を持っている主婦は29%（238/807）を占めている。

② 親同居・非同居別の個室の所有状態……個室平均所

表－1　個人的空間および個室所有状況（親の同居状態別）～第一次調査から

	親非同居								親同居								不明	計
	若夫婦	夫婦と幼児	夫婦と小学生	夫婦と中高生	夫婦または社会人大学生	中年夫婦	老夫婦	親非同居計	親と若夫婦	親と夫婦と幼児	親と夫婦と小学生	親と夫婦と中高生	親と夫婦または社会人大学生	中年夫婦	老夫婦	親同居計		
各ステージ別数	59	127	81	78	212	64	31	652	8	32	16	15	31	15	11	128	27	807
%[*1]	7	16	10	10	26	8	4	81	1	4	2	2	4	2	1	16	3	100
個人的空間[*3]有り数	27	42	38	45	140	47	26	365	5	17	11	11	22	12	9	87	15	467
(%)[*2]	(46)	(33)	(47)	(58)	(66)	(73)	(84)	(56)	63	(53)	(69)	(73)	(71)	(80)	(82)	(68)	—	(58)
他から独立した個室有り数	6	15	8	18	87	32	19	185	3	5	6	6	8	8	7	43	10	238
(%)[*2]	(10)	(12)	(10)	(23)	(41)	(50)	(61)	(28)	38	(16)	(38)	(40)	(26)	(53)	(64)	(34)	—	(29)

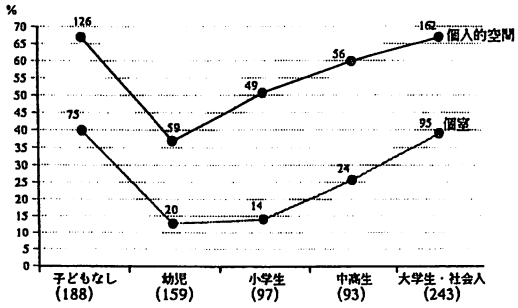
*1　%：807を100%とする割合
*2　(%)：各ステージ別の母数を100%とする割合
*3　個人的空間とは，「他から独立した個室」，「つながりがあり区切ることができる個室」，「家族と共同の個室」，「一角に設けられた専用空間」，「収納空間が専用」などをいう。

表－2　ライフステージ別調査対象

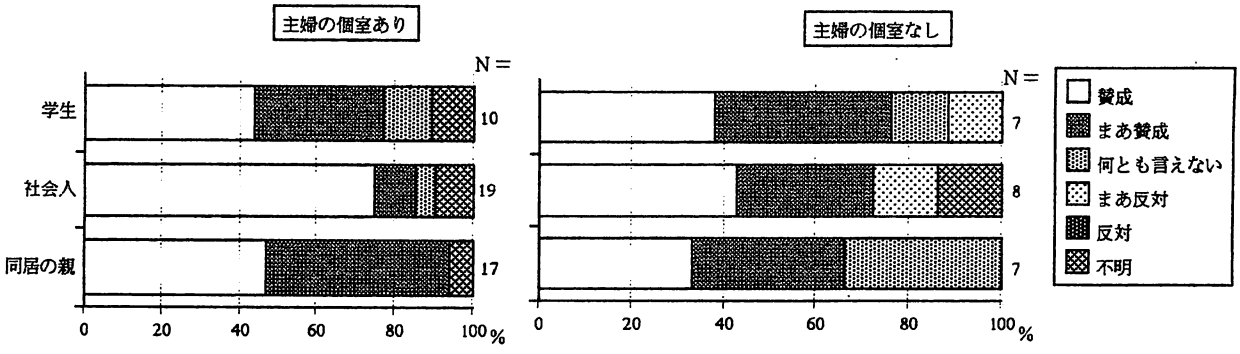
ライフステージ	例数
夫婦＋高校生	6
夫婦＋大学生	6
夫婦＋社会人	26
親＋夫婦	18
親＋夫婦＋高校生	3
親＋夫婦＋大学生	2
親＋夫婦＋社会人	1
合　計	62

表－3　主婦個室の有無別（延べ）世帯数

	個室有り	個室無し	合計
学生の子供のいる世帯	10	7	17
社会人の子供のいる世帯	19	8	27
親と同居している世帯	17	7	24



図－1　子どもの状態別主婦個室所有状況～第一次調査から
（数字は実数，%は各計に対する割合）



図－5　主婦個室に対する満足度 ──家族の立場から ──

表－4　「同居の家族との団らん」平均会話時間量（1日当り）
── 主婦個室の有無別 ──

	個室あり（分）	個室なし（分）
学生の子供がいる場合	49.4	45
社会人の子供がいる場合	49.1	35
同居の親がいる場合	59.7	65

表－5　「同居の家族との団らん」平均行為数（1日当り）
── 主婦個室の有無別 ──

	個室あり（個）	個室なし（個）
学生の子供がいる場合	2.4	2.1
社会人の子供がいる場合	2.1	1.3
同居の親がいる場合	1.6	2.3

平均あらかじめアンケート項目に示した団らん行為の○の数を合計し回答者で割ったもの

表－6　団らんに対する主婦の満足度
── 主婦個室の有無別 ──

	個室あり（点）	個室なし（点）
学生の子供がいる場合	2.4	2.8
社会人の子供がいる場合	2.5	2.3
同居の親がいる場合	2.8	3.0

「大変満足」4点，「満足」3点，「やや物足りない」2点，「不満」1点として合計し，平均を出したもの

有率は，親同居世帯では34％（43/128），親非同居世帯では28％（185/652）であり，親同居の方がより高いことがわかる（表－1）。

③　中高生以上の子供のいる世帯……図－1に示すように，子供の成長につれて個室所有率が高まる傾向にあり，個室を持ち始めるきっかけが，子供の成長に深く関わっていることがわかる。とくに中高生以上の子供のいる家族のうち個室を持つ世帯は119（中高生同居18＋6，大学生・社会人同居87＋8）例でその（同78＋15，同212＋31）35％を占めており，第一次調査対象世帯の全体の平均所有率（29％）より高い。

緒言において，この家族形態に対象を限定した理由の②，および③は予測通りであったことがわかる。

2．主婦の個室所有と家族コミュニケーション

1）第二次調査の対象世帯の概要

①　住宅形式……住宅形式は一戸建が8割強を占め，集合住宅は1割強である。これらの割合は，第一次調査対象層における同様の家族形態にみられる割合（前述1－1））とほぼ同じである。

②　家族の状態……子供を学生（高校生・大学生）と社会人に分けた場合，対象世帯数は「学生の子供がいる世帯」計17例，「社会人の子供がいる世帯」計27例，「親が同居している世帯」が計24例である。（表－2）

主婦の年齢は，50歳代が最も多く4割を占めている。就業する主婦は6割を占め，その約1/3は常勤雇用者である。

2）個室の有無と家族のコミュニケーション

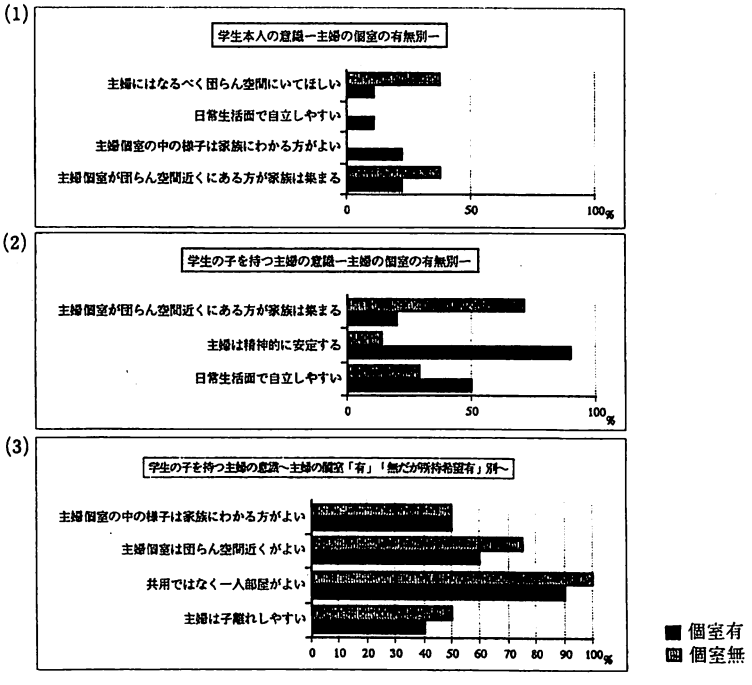
主婦の個室については「あり」が延べ46例，「なし」が延べ22例である。同居家族別にみた個室「あり」の割合は，学生の子供のいる世帯では6割，社会人の子供のいる世帯，および親同居の世帯ではいずれも7割である（表－3）。

以下，学生あるいは社会人の子供がいる世帯，および親同居の世帯における，主婦・子供・親それぞれの意識について，主婦の個室所有の有無別に述べる。

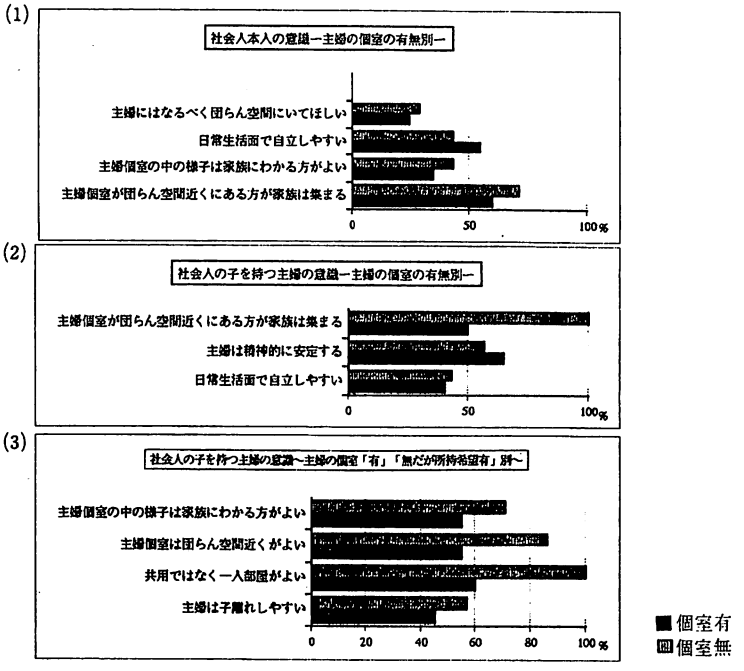
①　学生の子供がいる世帯

個室がある場合……子供で，主婦の個室所有に対して反対する例は皆無である（図－5）。主婦自身は，ほとんどが「精神的に安定する」と思い，半数が「（こどもが）日常生活面で自立しやすい」と答えている（図－2－1）。主婦と子供との団らんの時間量・行為数については，個室「なし」の世帯に比べると時間量・行為数ともに多い（表－4，5）にも拘らず，団らんに対する主婦の満足度は他の世帯（社会人の子供がいる世帯，および親同居の世帯）の主婦に比べてやや低い（表－6）（図－6）。

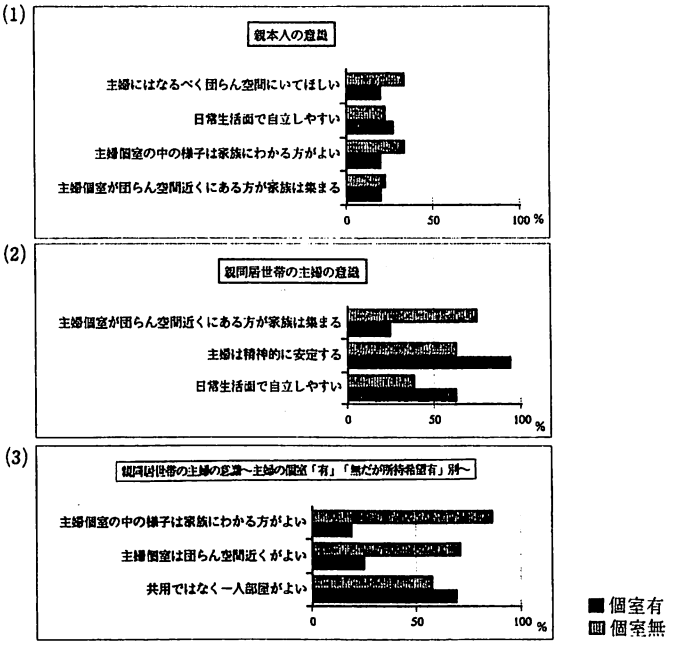
個室がない場合……主婦個室があれば「（子供自身の）日常生活面で自立しやすい」と思う子供は皆無であ



図－2　子供（学生）のいる世帯の意識



図－3　子供（社会人）のいる世帯の意識



図－4　親同居の世帯の意識

る（図－２－１）。主婦自身には，「一人部屋」で「団らん空間の近く（の場所）」にあるのがよい，という希望がみられる（図－２－３）が，「精神的に安定する」と個室の意義を認める割合は，個室「あり」の主婦と比較するとかなり低い（図－２－３）。

以上の結果から，個室「あり」の場合「なし」に比べて，親子の団らんは質量共にゆたかであるが，団らんに対する満足度はやや低い。つまり「なし」の方がコミュニケーション状態は良好と言える。個室「なし」の主婦の多くは個室の主婦自身に及ぼす効果よりも家族の団らんに与える影響の方に関心を持っている様子がうかがえる。

② 社会人の子供のいる世帯

個室がある場合……子供では，主婦が個室を持ったら「(社会人である自分達は) 日常生活面で自立しやすい」と思う割合が，学生の子供や同居の親の意識に比べて高い（図－３－１）。主婦の個室所有に関しても，積極的「賛成」の割合が3/4を占め，とくに高い（図－５）。また家族の集まりやすさのために個室を団らん空間近くに設けることを肯定するものが，子供も主婦自身も半数はいる（図－３－１，３－２）。主婦と子供との団らんの時間・行為数は，共に個室「なし」の世帯に比べて多く（表－４，５），団らんに対する主婦の満足度は個室「なし」の世帯よりやや高い（表－６）。また団らんに対する子供（社会人）の満足度は量的な面（時間）でとくに高率となっている（図－６）。

個室がない場合……子供（社会人）の意識としては，家族の集まりやすさからみて主婦の個室は団らん空間近くにある方がよいと思っている割合がとくに高い（図－３－３）。主婦の個室所有については，一部「まあ反対」もあり，個室「あり」の世帯に比べると意識に偏りがみられない（図－５）。主婦の希望意識では，「一人部屋」への志向が高い一方で，2/3が家族に個室内の様子をみられることを希望し，かつ家族の集まりやすさを意識している。また主婦の個室所有について主婦は「(主婦自身が) 子離れする」という期待を５割以上が持っている（図－３－３）。

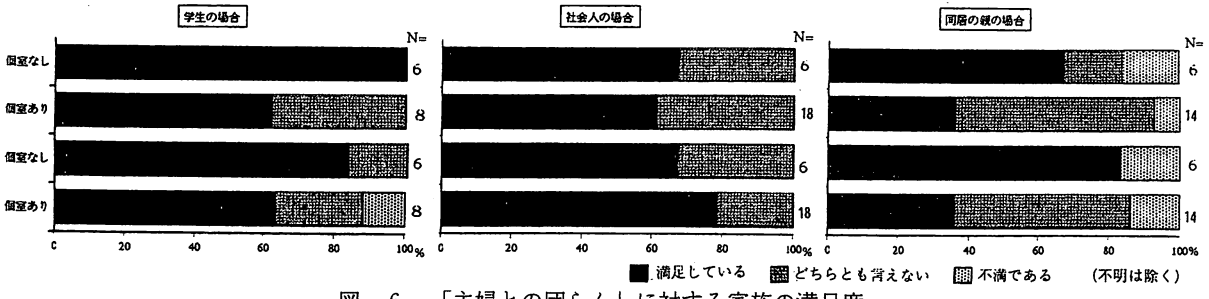
以上の結果から，個室「あり」は「なし」に比べて団らんが質量とも多く，かつ満足度も高く，個室を所有していても家族のコミュニケーションにとくに支障はないと思われる。個室「なし」の方は「個室は団らん空間近く」の意識が主婦にも子供にも強く，家族とのコミュニケーションをつよく意識している様子がうかがわれる。また個室所有によって得られる効果に対する期待は，学生の子供が同居する世帯（前項①）の主婦よりも強い。

③ 親が同居している世帯

個室がある場合……親の，主婦の個室所有に賛成する（「まあ賛成」を含む）割合は高く，主婦のプライバシーを尊重する傾向はみられる（図－５）。しかし親も主婦自身も団らんに関する満足度は個室「なし」に比べて低い（図－６）（表－６）。しかし「主婦にはなるべく団らん空間にいてほしい」の割合も高くはない（図４－１）ことから，満足度の低さは，個室があることと団らん空間に主婦がいないこととは関係ないと思われる。「(自分が) 精神的に安定する」「(親が) 日常生活面で自立しやすい」という主婦の個室に対する評価は，子供が学生，あるいは子供が社会人の世帯の主婦より高く，主婦にとっての個室の効果の大きさが推測できる。

個室がない場合……個室「あり」の世帯に比べて，団らん時間・団らん行為数ともに多く（表－４，５），主婦も親も現在の団らん状況に対する満足度は比較的高い（図－６）（表－６）。また，個室「あり」の親に比べ「なし」の親は，「主婦にはなるべく団らん空間にいてほしい」「主婦の個室の中の様子は家族にわかる方がよい」と思う割合が高くなっている。主婦自身も「個室の中の様子が家族にわかる方がよい」の意識が高く，「一人部屋がよい」という意識も，子供が学生，あるいは社会人の世帯の主婦より低い（図－４）。

以上から，個室「あり」の場合，親とのコミュニケーションが個室「なし」に比べて乏しいことがわかった。親とのコミュニケーションについては，その親が主婦にとって義理の親か実の親かが関わってくると考えられるが，たまたま調査対象世帯の親は全て舅や姑という義理の関係であった。個室「あり」の主婦は「精神的な安定」や「(親の) 日常生活面での自立」の割合が高かったが，仮に親とのコミュニケーションが良好でない場合



図－６　「主婦との団らん」に対する家族の満足度
(時間及び内容について)

には，いっそう個室は効果的であると思われる。一方，個室「なし」の主婦は，個室の中の様子が家族にわかるようなオープンな個室を望む傾向がみられた。

3．主婦自身が描く理想の個室*4

1）個室を理想とする割合

表7に示すように，個人的空間の中でも個室を8割以上が理想としている。その内訳は，親と同居する主婦の89%（66/74），同居していない主婦の81%（97/120）であり，親と同居する主婦においてやや高い。子供がいる世帯では，学生（高校・大学生など）の子供を持つ主婦（77%）よりも，社会人の子供を持つ主婦（84%）の方が個室を理想とする割合が高い。

2）理想とする個室像

個人的空間の中でも個室を理想とする主婦に対象をしぼって，その個室像の傾向を探ってみたい。

① プライバシーに対して

表－8に示すように，対象とする主婦の7割近くが独立した自分一人の個室を理想としている。家族の部屋と可動間仕切りで隣接した個室や，家族と共用する個室を理想とする者はそれぞれ1割弱である。家族形態別にみると，親と同居する主婦の方が，家族の部屋と隣接した個室や家族と共用の個室の占める割合が高い。隣接あるいは共用の場合のその家族とは，ほとんどが「夫」である。親が同居している世帯の主婦は理想の個室に夫と時間を共有する場としての機能を見込んでいる様子がうかがえる。

なお個室の出入り口の建具の種類を表示している主婦は約6割近くいる（表－9）が，そのうち2/3弱はドアである。ドアを理想とする割合は親同居世帯の主婦の半数を占め，プライバシー意識の強さがうかがえる。

② 団らん空間との関わり

個室の描写の際，団らん空間も含めて図で示したり，団らん空間を意識した記述をした例は，個室を理想とする主婦の32%（52/163）であった。つまり大半が団らん空間との関連をとくに意識していないことがわかる。団らん空間に関心を持つ層が描く理想の個室の特徴をみると，「団らん空間と可動間仕切りで隣接した個室」をあげる主婦が最も多い（17%，28/163）。次いで「団らん空間の近くにある個室」（9%，14/163），「団らん空間と遠いが同じ階」（4%，6/163）「団らん空間と異なる階」（2%，4/163）と続く。つまり個室と団らん空間との関連を意識していた主婦においては，団らん空間と距離的に近い位置にある個室を理想とする主婦がより多く，距離が遠のくにつれて占める割合が低下する傾向がみられる。

家族形態別にみると，親と同居する主婦は，高校生以上の子供を持つ主婦に比べて団らん空間と関連させた記述例の割合が低い。とくに「団らん空間と可動間仕切りで隣接した個室」を理想とする割合は，高校生以上の子供を持つ主婦の1/2にすぎない（表－10）。主婦が個室像を求められ，家族とのコミュニケーションを意識する場合，その家族とは親よりも子供（高校生以上）との関係においてより強く意識する傾向がうかがえる。

表－7　主婦が理想とする個人的空間
（イメージ図より）

同居家族形態	計 (%)	個室 (%)	個室以外 (%)	判別不能 (%)
親	47 (100)	41 (87)	3 (6)	3 (6)
親と学生	17 (100)	15 (88)	1 (6)	1 (6)
親と社会人	7 (100)	7 (100)	－	－
親と学生と社会人	3 (100)	3 (100)	－	－
親同居計	74 (100)	66 (89)	4 (6)	4 (6)
学生	61 (100)	47 (77)	11 (18)	3 (5)
社会人	56 (100)	47 (84)	4 (7)	5 (9)
学生と社会人	3 (100)	3 (100)	－	－
子供同居計	120 (100)	97 (81)	15 (15)	8 (8)
合計	194 (100)	163 (84)	19 (10)	12 (6)

表－9　個室出入り口の建具
（イメージ図より）

同居家族形態	独立している個室計 (%)	ドア (%)	引き戸ふすま (%)	描写なし (%)
親	23	13	3	7
親と学生	8	3	2	3
親と社会人	5	1	1	3
親と学生と社会人	2	2	－	－
親同居計	38 (100)	19 (50)	6 (16)	13 (34)
学生	34	9	5	20
社会人	38	12	10	16
学生と社会人	1	－	1	－
子供同居計	73 (100)	21 (29)	16 (22)	36 (49)
合計	111 (100)	40 (36)	22 (20)	49 (44)

表－8　主婦の理想の個室と家族の部屋との関係（イメージ図より）

同居家族形態	個室が理想計 (%)	独立している個室 (%)	誰かの部屋と隣接する個室 (%)	誰かと共用の個室 (%)	判別不能 (%)
親	41 (100)	23 (56)	5 (12)	6 (15)	7 (17)
親と学生	15 (100)	8 (53)	3 (20)	2 (13)	2 (13)
親と社会人	7 (100)	5 (71)	－	－	2 (29)
親と学生と社会人	3 (100)	2 (67)	－	－	1 (33)
親同居計	66 (100)	38 (58)	8 (12)	8 (12)	12 (18)
学生	47 (100)	34 (72)	2 (4)	1 (2)	10 (21)
社会人	47 (100)	38 (81)	1 (2)	4 (9)	4 (9)
学生と社会人	3 (100)	1 (33)	－	－	2 (67)
子供同居計	97 (100)	73 (75)	3 (3)	5 (5)	16 (16)
合計	163 (100)	111 (68)	11*1(8)	13*2(8)	28 (17)

*1, 11人のうち「誰か」＝夫が8人
*2 13人のうち「誰か」＝夫が13人

表－10　主婦の理想の個室と団らん空間との関係（イメージ図より）

同居家族形態	個室が理想計 (%)	団らん空間と隣接 (%)	団らん空間に近い (%)	団らん空間に遠い (%)	団らん空間と異なる階 (%)	団らん空間と関係無し (%)
親	41	3	4	1	1	32
親と学生	15	3	2	－	－	10
親と社会人	7	－	－	－	－	7
親と学生と社会人	3	1	－	－	－	2
親同居計	66 (100)	7 (11)	6 (9)	1 (2)	1 (1)	51 (77)
学生	47	9	3	2	2	31
社会人	47	12	5	3	1	26
学生と社会人	3	－	－	－	－	3
子供同居計	97 (100)	21 (22)	8 (8)	5 (5)	3 (3)	60 (62)
合計	163 (100)	28 (17)	14 (9)	6 (4)	4 (2)	111 (68)

まとめ

主婦が個室を持つと，家族とのコミュニケーションが疎かになるという懸念が若干みられる点に注目し，本報告では主婦個室所有率の比較的高い家族形態，すなわち高校生以上の子供（学生，社会人）がいる世帯，および親が同居する世帯について，主婦の個室所有と家族のコミュニケーションとの関わりについて検討した。　その結果，以下のようにまとめることができる。

1）学生の子供がいる世帯の場合，個室「あり」世帯は団らん時間・行為数共に個室「なし」世帯に比べて豊富であるにもかかわらず，子供と主婦の両方の団らんについての満足度は低い。しかし個室「あり」の主婦の「精神的に安定する」効果を認める割合は高い。

自由記入欄に述べられた理想形態では，個室希望が多い反面，個室以外の個人的空間，たとえば居間のコーナーのような，より開放的な個人的空間を望む割合も比較的高い（2割弱）。学生の子供のいる世帯は，今回の調査対象のうちではもっとも家族とのコミュニケーションについて気にしている家族形態といえる。

2）社会人の子供がおり，かつ主婦個室「あり」の世帯では団らん時間，行為数がともに多く，団らんに対して主婦・子供（社会人）両方の満足度が高い。主婦個室の存在がむしろ家族コミュニケーションを活発にしているとも考えられる。

個室の理想形態については，「団らん空間と隣接」が他の家族形態に比べても高い（32%）。実態調査においても「団らん空間近く」が高率であった。

3）同居する親がいる世帯では，主婦個室がある場合に団らん時間・行為数共に少なく，親が感じる満足度も目立って低い。しかし個室「あり」の主婦は，「精神的に安定する」や「(親が) 日常生活面で自立しやすい」と思っている。同居する親がいる世帯の主婦の個室所有は親とのコミュニケーションを穏やかに保つためにも主婦個室が必要とされていると考えられる。そ

れは同居の親が主婦の個室所有に対して賛成する割合が高い（９割以上）ことからも推察される。

親同居の世帯は，独立している個室を理想としている割合が高く，これは親非同居世帯と同様である。しかし夫の部屋と簡易間仕切りで区切られた個室，あるいは夫と共用の個室を希望する割合は非同居世帯より高い。つまり夫婦が二人だけになる機会を空間的に必要とする割合が高い。家族とのコミュニケーションについては，親同居の世帯では非同居世帯に比べると描写や記述にあまり表れていない。意識調査の結果と同様，個室所有と家族コミュニケーションとの関わりよりも重視したい条件，すなわち主婦の個室確保によって夫とのコミュニケーションを保つことができることを重要視する傾向がうかがえる。

本研究は，平成６～７年度文部省科学研究費（一般研究Ｃ）の補助を得て実施した研究の一環であり，卒業研究および研究生当時の研究の一部です。調査の実施にあたり，京都府立大学の卒業生の皆様に多大のご協力をいただきました。心からお礼を申し上げます。

参考文献

1．町田玲子・坂田　希『主婦の個室に対する意識ー京都の都市住宅の場合ー家族の自立を可能にするための住居計画的研究(1)』　京都府立大学学術報告・理学・生活科学46号　７～13　1995
2．竹下輝和『個室成立以後の家族コミュニティーに関する実証的研究』　㈶住宅総合研究財団　1992
3．町田玲子『高学歴主婦の個人的空間確保の実態と意識』日本家政学会誌第48巻10号，1997
4．町田玲子（1996）主婦の個人的空間の希望像ー家族の自立を可能にするための住居計画的研究(2)　日本家政学会第48回大会研究発表要旨集　278